

ボクと先輩の最初の戦場

ほろろぎ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

帝国の剣士、遠野。皇庁の王女、タドコロ。

中立都市で偶然出会った二人の男女は互いに惹かれあうが、両国の戦争がその想いを許さねえからなあ？

それぞれの悲願を達成するため、遠野とタドコロは戦場で望まぬ再会を果たす。

アニメが面白かったので勢いで書きちゃいました。

目次

第一話 釈放
第二話 邂逅

1 7

第一話 釈放

星の地下深くから湧き出た未知のエネルギー、星霊。

星霊を宿した人間は魔法という超常の力を得、それによって非魔法使いの人間たちから迫害を受けていた。

先進機械文明によってハツテンを遂げた『帝国』によって魔法使い——否、星霊使いは魔女狩りさながらの仕打ちを受け、滅びの道を歩むことになる。

そんな中、一人の星霊使いが帝国に反旗を翻した。

炎の魔人、ボク・ヒデ・ネムラス一世。

ヒデは自らの魔法、『火で死ぬ』によって帝国を猛火の海へと変えた。

そうして反逆の星霊使いヒデを筆頭に、他の星霊使いらは自分たちが安全に暮らせる国である『皇庁』を星の裏側につくりあげる。

——それから百年、帝国と皇庁は互いを憎みあい、終わることのない戦争を繰り広げていた。



ここは帝国。正式名は、『なんか天……天よ天帝国』。

そのとある施設に存在する一室。

窓も無く明かりのまったく灯らない、冷たく暗い監獄を思わせる部屋の中央に、一人の青年が立たされていた。

青年は両手、両足に、自由を束縛するための枷をはめられている。

それは、青年が罪人である証だ。

彼が立たされているこの場所が、囚人に決を言い渡すための施設であることもまた、それを裏付けている。

不意に、室内に明かりが灯った。青年の正面に設置されているモニターの画面が点いたためである。

モニターには黒いマスクを被り、深いヒゲを生やしたクマのようなガタイの男が映っている。

「よく来たな、黒豚……いや、受刑者『遠野・マズウチ・ノドカ』」
モニターの男、ヒゲクマ裁判官が言った。

「今日は何しに来たんだ？」

「……今日は……（小声）」

「ハキハキ言うんだよ！ なにしに来たんだ？」

遠野と呼ばれた青年は一年の間囚人の身であったため、誰かと話す機会もなく久しぶりの発声で喉が枯れている様子だ。

あー、喉渴きましたね。と言ってもアイステイヤーが出されるわけでもないため、ツバを飲みわすかでも咽頭を潤すと、遠野はゆっくりとヒゲクマの問いに答える。

「二年前に僕が犯した罪を問うため……ですか？」

遠野が犯した罪。それは、彼が帝国に捕らわれていた皇庁の皇子である、だいち君を独断で脱走させたことだ。

だいち君は帝国に敵対する星霊使いであるが、彼の力はとても弱く人を傷つけるようなものではない。

そんな非力な少年まで捕虜とするちよつと過激な帝国派のやり方に、遠野は異を唱えたのだ。

だがそんな考え無しの行いはすぐにバレ、遠野はあえなくお縄になり懲役114514年を言い渡されこの鉄壁の監獄へと収監されてしまった。

『お兄さんだあれ？』

遠野の脳裏には今でも、牢屋の中で震えていただいち君の怯えた顔が刻まれている。

敵国に捕まり命さえも危うい状況に置かれた不安げな少年を安心させるため、遠野はこう言った。

『僕は、だいち君の、お母さんのお友達、遠野。君は、だいち君。よろしくね！ これで知らない人じゃなくなったよ』

その言葉に安堵したのか、だいち君は少年らしいあどけない笑みを浮かべた。

遠野は捕まった後でも、だいち君を逃がしたことを微塵も後悔していない。

ただ、無計画に行動してしまったことだけは悔いていた。

師匠である葛城蓮——虐待おじさんから、『おじさんはねえ、君みたいな考え無しのねえ、この早とちりが大嫌いなんだよ！』と、その点は何度となく注意されていたのに。

「遠野、お前……今日で釈放だ」

「えこれ」

物思いにふけていた遠野の耳に信じられない言葉が聞こえてきた。

釈放……つまり、遠野の罪はここにきて不問にされたのだ。

帝国に仇なす皇帝の重要人物に手を貸すなど、国家反逆罪に値する重罪だというのに。

思わぬ事態に絶句する遠野。

だが、遠野の思考は即座にヒゲクマの真意に気付いた。

「代わりに、僕になにかやらせる気ですね？」

「ひじょくくくくくに聡明な態度すばらしいですね」

話が早い、とヒゲクマはニヤリと口角を上げる。

「お前には、皇庁の強大な星霊使いである『白銀の単眼魔女』を討伐してもらいてえんだわ」

白銀の単眼魔女とは、たった一人で帝国の対星霊部隊を、それも複数のチームを相手にし、無傷で殲滅させた恐るべき魔法の使い手である。

到底、たった一人の男に太刀打ちできる相手ではないと思われる。

が実は遠野も、かつては帝国が誇る最強の戦闘集団『射徒精』、その十一人の一人に選ばれたほどの人物なのだ。

「なに言ってるんすか？ やめさせてくださいよ本当に！ って訳にはいかないんですよ」

「おっいいねえ！ だいぶわかってきたじやないか！ やればできる！」

こうして遠野は再び自由を得るため、かつて身を置いていた戦場へ

と戻ることを決めた。

「出てって、どうぞ」

「あつ、おじやましましたー」

入口を見張っている門番に見送られ、一年ぶりに刑務所から出た遠野。

外の世界の空気を全身で感じ、感慨深げに言葉を漏らす。

「家の外だあ……」

すでに陽は落ち空は闇夜。その夜空に小さな星が煌めいている。

星々の光に目を奪われ、はえくと空を見上げていた遠野に一人の男が近づいてきた。

「君が、遠野くんだね？ お勤めご苦労ナス！」

遠野の出所を労う男。

メッシュ状のタイツから透ける上半身トレあり体系の筋肉質のこの男は、かつて遠野が所属していた対星霊使い部隊の隊長——
KBTIT。

仲間からはタクヤさんの愛称で親しまれているナイスゲイだ。

「あらいらつしやい！ ご無沙汰じゃないっすかア！」

一年ぶりの戦友との再会に喜色を浮かべ、遠野は柄にもなく大声が出てしまった。

二人はガツチリと握手を交わす。

タクヤの手は、人を自分の手足として動かす長としての役割に似つかわしくないほど硬く鍛えられており、逆に遠野の手は一年の拘禁生活によってすっかり痩せ細っていた。

つらい一年間だったろう。

タクヤは遠野の身の上を想うと涙が浮かびそうになるが、それを必死にこらえ話しかける。

「それにしても、あれだけのことをしでかしてたった一年で釈放とはな。まあ、それだけ相手がやはりヤバイ奴だからだろうけど」

「そんなに強いんですか？ 例のなんとかの魔女って」

「白銀の単眼魔女、な。あいつが姿を見せたのは、ちようどお前が投獄された後だったから、知らないのも無理はない」

言おうかなくどうしようかなく、と勿体ぶるタクヤ。懐から一枚の写真を取り出すと、遠野の前にかざす。

写真には一人の女性が写っていた。

全裸であり、その裸体は白銀に煌めいている。顔にだけ、正体を隠すように単眼のゴーグルが装着されていた。

「まるで物語に出てくる怪物、サイクロプスみたいだあ」

遠野が女性を見た感想を口にする。

「こいつがその魔女だ。この女のおかげで帝国の戦線は大打撃をこうむってて、もう許せるぞおい！」

「この人が、僕の戦う相手……」

「ハツキリ言つて、お前でも敵うかどうか信じらんねえ！ 上の奴らも、一年も戦いから離れてた奴にこんな任務を課すとか、速攻おしおきかよ……」

溜息と共に言葉を漏らすタクヤに、遠野は微苦笑して返す。

「争いを止められるなら、僕はなんでもやりますよ」

「ん？ 今なんでもするつて言つたよね？」

「ええ。このどうしようもない戦争に終止符を。一年前も今も、僕が考えていることはそれだけですから」

遠野の爬虫類を思わせる瞳に、強い決意の光が宿る。

彼がなにを思つて戦場に身を置くのか、タクヤは知らない。

だがこの男ならば本当に、百年も続く両国の争いを止められるかもしれない。

タクヤはそう信じられるからこそ、遠野を手元に置き面倒を見ているのだ。

「それじゃあ、早速前線に行つちやいますか？ 行つちやいませうよ！」

「病み上がりですぐに戦場に立とうとかうつそだろお前！ 笑つちやうぜ」

思い立ったら即行動の遠野を制止すると、タクヤは一枚のチケットを彼に渡した。

「？ なんですか、これ」

「中立都市でやってる演劇の券だ。お前こういうの好きだろ？」

「そうですけど、今はこんなの見てる場合じゃ……」

「戦士には休息も大切って一番言われてるだろオオン!? いいから少しくらい羽を伸ばして、シャバを楽しんでこいほい！」

タクヤは無理やりチケットを遠野に握らせると、そそくさとその場を後にした。

言葉は強いが、タクヤなりに仲間の心身を案じてのことだ。

それが分かっているから、遠野もこれ以上は反論せず券を受け取った。

「敵対する国同士の男女の悲恋を描いたオペラ、か。お。も。し。ろ。そ。う。で。す。ね。」

このあと、遠野はかつて住んでいた寮へと帰った。

監獄の硬いベッドとは違う柔らかい布団でぐっすり眠り、翌日の朝からバスで半日かけて、砂漠の中立都市であるエインへと向かうのだった。

第二話 邂逅

反逆の星霊使い——ボク・ヒデ・ネムラスが建国した魔法の国、ネムラス皇庁。

その王宮、ガンボリア宮殿の一室にある自分の部屋の扉を開けた少女は、大声を上げながらドサツとソファーに座り込んだ。

「ぬわあああああん疲れたもおおおおおおん」

彼女の名は、タドコロコ・ウジ・ネムラス。

初代ネムラスであるヒデの血を引く直径の末裔であり、このネムラス皇庁の王女なのだ。

なぜ彼女がこれほど疲れているかというと、敵対する『なんか天帝国』へ出向き、帝国の兵士と戦っていたからだ。

彼女の魔法は王族の血筋もあって強大無比であり、そこらの兵隊などなん百人束になっても相手にならない。

なのだが、こうした帝国との戦闘任務をここ数日立て続けに行ったため、ついに疲労が限界に来てしまったのだ。

「やめたくくなりますよ〜戦っ争う〜」

「(そんなこと言うのは) やめてくれよ……」

愚痴を吐くタドコロコ・ウジを注意するのは、彼女の側近である執事のKMRだ。

打倒帝国を成し遂げ、世界を一つにまとめ上げることができるのは彼女しかいない、とKMRは少女に忠誠を誓っている。

姫としての意識に欠ける発言に、つい苦言を呈してしまったのも仕方のないことだろう。

「な〜こと言っただってよお、こんな毎日続いたらもう、やめたくなくなりますよ〜」

ソファーにグツタリともたれかかる不満気な少女。

それに構わず、KMRは更なる試練をタドコロコ・ウジに課す。「皇帝からは、もう一件だけ任務を預かってるんですよ」

「あーもう一回いってくれ」

「皇帝『ダイセ・ンパイ』様から、帝国が樹海で建造中の長距離砲の破

壊が、姫の次の任務です」

皇帝ダイセ・ンパイ。それはタドコロコ・ウジの父であり、ネムラス皇庁を治めている王様だ。

「王の命は絶対。当たり前だよなあ？」

ハア~~~~…、とクソデカ溜息を吐きつつ少女はソファーから立ち上がる。

「じゃけん夜行きましようね〜」

「あつ、おい待てい」

夜襲をかけようというタドコロコ・ウジに、KMRは待ったをかけた。

「その前に、姫様に休暇を与えよとの命です」

KMRはポケットから一枚のチケットを取り出し、少女に渡す。

それは、中立都市エインで催される舞台の演劇の券であった。

「姫様が以前、この演劇のポスターをチラチラ見ていたのを思い出しまして、僭越ながら用意させていただきました」

「(見に行っても) いいっすかあ!?! OH〜♪」

思わぬ心遣いに喜びを露わにするタドコロコ・ウジ。

「明日はゆっくりしてください」

KMRは部屋を後にし、少女も翌日の舞台を楽しみにこの日は眠りについた。



一夜明け、タドコロコ・ウジはKMRの送迎で中立都市へと来ていた。

今回は道中でのKMRの同伴はない。

一人きりでゆつくりと羽目を外してほしい、というKMRの計らいによるものだ。

タドコロコ・ウジは単身で、演劇が催される建物へと入場する。

「入って、どうぞ」

「おつす、おじゃましまーす」

受付にチケットを渡し席へと案内されると、ほどなくして場内の明かりが落とされ、劇の公演が始まった。

「わあ、これが貴女の選んだ道ですかー。色んな障害がありますねー。こんなに相容れないとは思わなかったあ」

「ここは貴方と会う最後の日で、明日に、戦争があるんだ。後で、そこで戦おうよ」

「(愛し合う二人が殺しあう運命なんて) これはキツイですよ」

「じゃあ今、(朝日を地平線の) 上にあげるから」

開演から一……か二時間ほど経ち、物語も終盤へと近づいていた。

敵対する国に住む男女が互いの素性を知らないまま愛し合い、またその正体を知り別れを告げるクライマックスシーンだ。

客席のあちこちから鼻をすする音が聞こえており、タドコロコ・ウジも皆と同じように涙をぬぐい劇に見入っていた。

「悲しすぎィー！」

すでにハンカチはその機能を果たせず、これ以上水分を吸い上げることが出来ないほどグショグショになっている。

やむなく少女は服の袖で涙と鼻水を拭う。

と、スツと横から一本の腕が差し込まれた。その手にはハンカチがあり、タドコロコ・ウジに対して向けられている。

「あの、これ良かったら使ってください、どうぞ」

「……ありがとナス」

暗がりですら男という事しか分からないが、タドコロコ・ウジは大人しく見知らぬ男性の厚意に甘えることにした。

ハンカチを受け取り涙を拭き、物語の終焉まであと少し、というところで予期せぬトラブルが発生した。

演者の一人が舞台中に足をくじってしまったのだ。

「申し訳ありませんが、本日の公演はここで中断させていただきます。センセンシャル！」

怪我人に無理をさせるわけにはいかないと、舞台は急遽幕を閉じる

ことに。

ウツソだろお前!?

盛り上がり所さんを前にしてお預けを食らった観客たちは総立ちでブーイングを起こす。

野次の嵐を受けうるたえる舞台関係者。

「……ああ、くしょうがないっすねえ、く」

アタフタする関係者の様子を見ていたタドコロコ・ウジにハンカチを渡した人物は、席を立つとツカツカとステージへと歩を進める。

「ああん?! お客さん?! (レ)」

男は無言で舞台へ上がる。その行動に、関係者が驚きの声を上げた。

関係者が男を舞台から降ろそうと動きだす前に、男は口を開き声を発する。

「アン！ アン！ アン！ アン！ アン！ アン！ アン！ アン！ アン！
！ ア、アアーン！」

会場に響き渡る男の声。

それはとても澄んだ、妖精が奏でるメロディーのような美声で歌われる歌だった。

男の歌を聞いたタドコロコ・ウジたち観客は、まるで春の日のそよ風に吹かれているかのような、暖かで爽やかな心地良さを感じていた。

まさに世界レベルといっても過言ではない美声。

観客たちは中断された劇への不満も忘れ、男の奏でる音楽に陶醉した。

やがて一曲歌いあげた男は、客席に向かって頭を下げると、黙ってその場を後にした。

客たちは揃って拍手をし、去っていく男を称える。

「……あつ、おい待てい！」

他の客同様男の美声に酔いしれていたタドコロコ・ウジだが、はたと我に返ると男のあとを追いかけて始めた。

おそらく男は、公演が中断された観客らの不満を解消するためにこ

のような演出を行ったのだろう。

その粋な心遣いに気付いたのは、タドコロコ・ウジただ一人だけだった。

だからだろうか、少女は純粹に男に会ってみたいと思った。

ハンカチを借りた礼もあるのだが、他者を気遣う優しさを持った男の正体を知りたいという気持ちだが、タドコロコ・ウジに大胆な行動を起こさせる。

「ふぁー、あ待ってくださいいよお」

ちようど会場の外へ出た所で、少女は男に追いつくことができた。自分を呼び止める声に、男は歩みを止め振り返る。

「!!」

時が止まった。

タドコロコ・ウジも、男も、互いの姿が視界に入った瞬間、まるで稲妻に打たれたかのような衝撃が走った。

どこか爬虫類を思わせる男の顔。その瞳にはなにか、強い決意を秘めたような輝きを少女は感じる。

「貴女は……」

男が尋ねる。

「……タドコロコ・ウジ」

タドコロコ・ウジは、とっさに偽名を使った。

中立都市とはいえ自分がネムラス皇庁の姫君であることは隠さなければならぬ、とKMRからキツク言われているから。

「お前の名前は……」

「……遠野・マズウチ・ノドカ、です」

遠野が答える。

彼もまた、タドコロコの少女特有の可愛らしさのある顔の中に、凜とした芯の強さを見出していた。

互いが互いの内に秘めたものを感じていたが、その正体にまでは気づけない。

二人は写真のように動きを止め、いつまでも見合ったままだった。



どれくらいの間、遠野とタドコロは見つめあっていただろう。会場から出てくる多数の観客のざわめきによって、二人は我に返った。

「あ、さ、これ」

タドコロは借りていたハンカチを遠野に返す。

遠野は黙ってそれを受け取った。

これで用は済んだ。あとは互いに別れるのみ、そのはずだった。

「……マズウチさあ、美味しいラーメン屋のレストラン、知ってんだけど……食いにいかない？」

だが、タドコロが咄嗟に発したこの言葉によって、思わぬことに二人は食事を共にすることになった。

女性の方から男性を食事に誘うなど、王女としては相応しくない作法だ。

けれど、このまますぐに遠野と別れたくないとどこかで思っていたタドコロは、つい声をかけてしまったのだ。

レストランまでの道中、男女はぎこちない会話を紡ぎながら歩を進める。

「二十四歳、学生です」

年齢と職業を訪ねられたタドコロが答えた。

年齢は本当だが、姫であることを隠すため嘘を吐いたことに、少女は若干の後ろめたさを覚える。

それを誤魔化すように、今度はタドコロが質問する。

「遠野は何歳なの？」

「二十三ですね」

「ふーん、俺より年下なのか」

「そうですね。……先輩って呼んでいいですか？」

「あつ、いつすよ」

遠野の無邪気な頼みを快諾するタドコロ。

「仕事はなにやってんの？」

「んまあ、そう……」

言葉を濁す遠野。

自分も隠し事があるため、タドコロは追及することはしなかった。

「こーこー」

「はえ、すっごい大きい……」

レストランの前に到着し、タドコロが先導して店内に入る。

この店は、中立都市に来るたびに立ち寄る、彼女のお気に入り場所なのだ。

「ノドカ、喉乾かない？」

タドコロがそう言いながら席につくと、すかさずウェイターが水とメニューをテーブルに置いた。

遠野とタドコロは同時にメニューに手を伸ばす。と、結果二人の指先が触れ合うことに。

男女は驚いたように、とつさに手を引つ込めた。

「お、お先にどうぞ」

セリフすら被ってしまい、さらに頬を染める二人。

「じゃあ、一緒に見よっか」

遠野ははにかみながら、メニューを広げタドコロと並んで覗き込む。

互いの肩が触れ合い、少女の使っているであろう香水の香りが遠野の鼻をくすぐった。

「色んな料理がありますねー。こんなに揃ってるとは思わなかったあ」

意識を逸らすように、遠野はわざとらしく感嘆の声を上げる。

しばしメニューを眺め、注文が決まり遠野は店員を呼び止めた。

まずは飲み物を頼むため、遠野とタドコロは同時に口を開く。

「ビール！　ビール！」

タドコロが笑みを浮かべ遠野の方を向いた。

「おっ、遠野もビール好きなのか？」

「ええ。よく同僚から、仕事上がりに貰うんですよ」

遠野は、過酷な訓練を終えるといつもご褒美として、缶ビールをおごってくれるタクヤのことを思い浮かべる。

二人は続けて、メインの食事の注文に入る。

「サーモンとズッキーニの生クリームラーメン。麺やわ目で量は大盛り。食後はアイステイターで、睡眠薬を一つお願いします」

注文を言い終わると同時に、「ファッ!？」と驚きの声を上げる遠野とタドコロ。

驚くことに二人の好みは、食べ物から飲み物まで、なにからなにも完全に一致していたのだ。

「……ラーメン好きなのか?」

即座に運ばれてきた大盛りラーメンをすすりながら、田所が問いかける。

「一番好きですね。こういう変わり種もいいですけど、オーソドックスな醤油や塩味もうん、おいしい」

「俺もそうなの……ソーナノ。暑い時には冷やし中華もいいゾ、これ」

「いいですね、冷やし中華。トマトとハムだけのシンプルなのをよく作ってますよ」

「ああ、いいですね。夏の暑い時期なんか毎日でも食えるゾ」
誰かと談笑しながら食事をとるなんて、いつぶりだろうかとタドコロは思う。

王女としての品格を求められる彼女は、普段の食事は黙って静かに黙々ととるものだと言われている。

ものを食べる行為がこんなに楽しいものだということを感じられるのは、一緒に居るのが遠野という男だからだろうか?

遠野もまた同様のことを感じていた。

この一年間、無人刑務所で出される味気ないレーションは、ただ命をつなぐための補給という機能的なものでしかなかった。

それ以前も、戦場に身を置く彼にとって食事とは、戦闘行動を行うためのエネルギーの摂取という以上の意味はないものだった。

それが、タドコロという女性と共にすするラーメンの、なんと華やかなことか。

一体、目の前の人物はなぜこれほど魅力的なのか。この疑問が二人の心を捉えて、離そうとしないのである。

だが、今は答えを出すよりもまず、目の前の時に集中しよう。

タドコロは快活な笑顔を浮かべながら、遠野もまた静かにほほ笑みながら、二人は至高の食事を続けるのだった。